

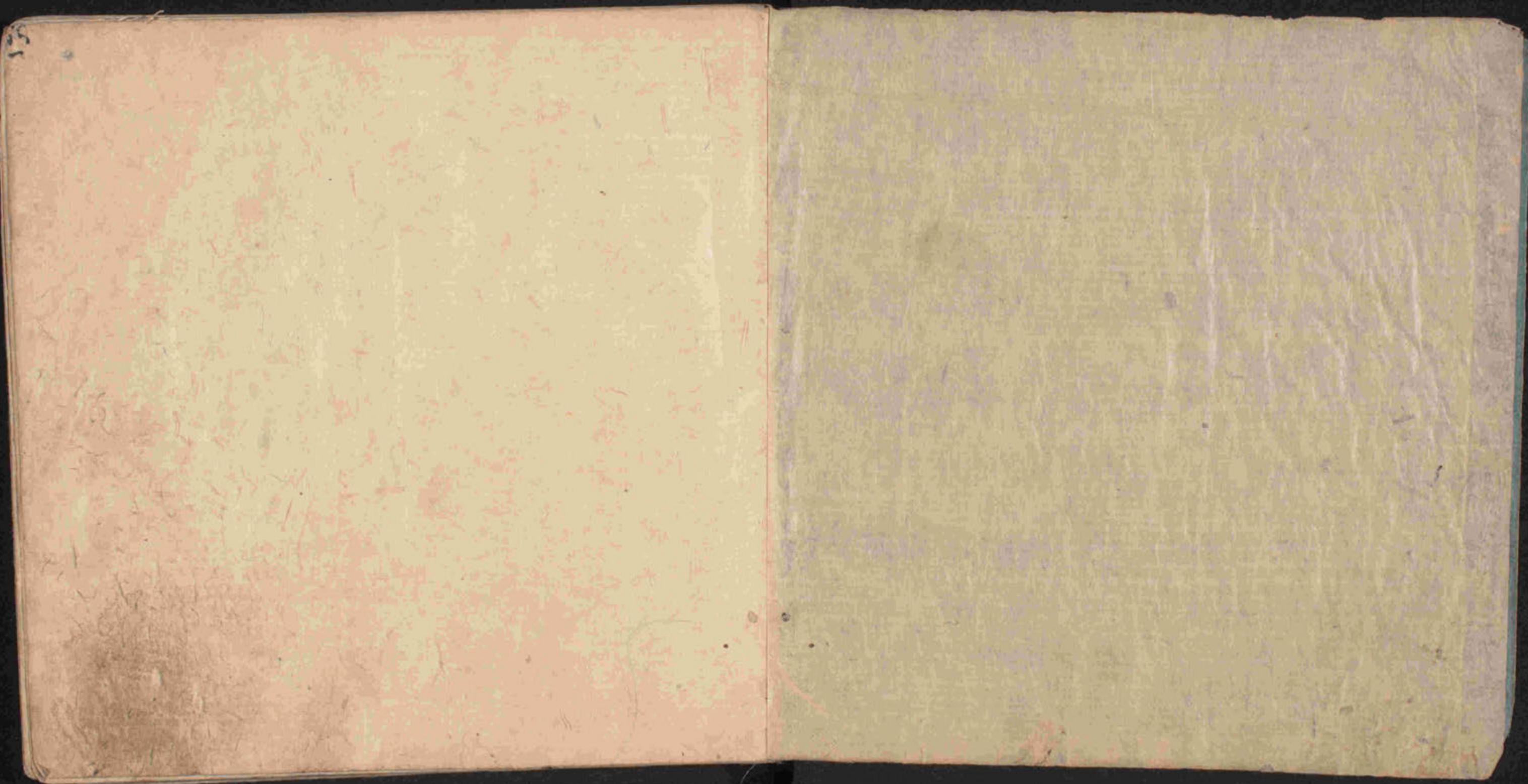
元词

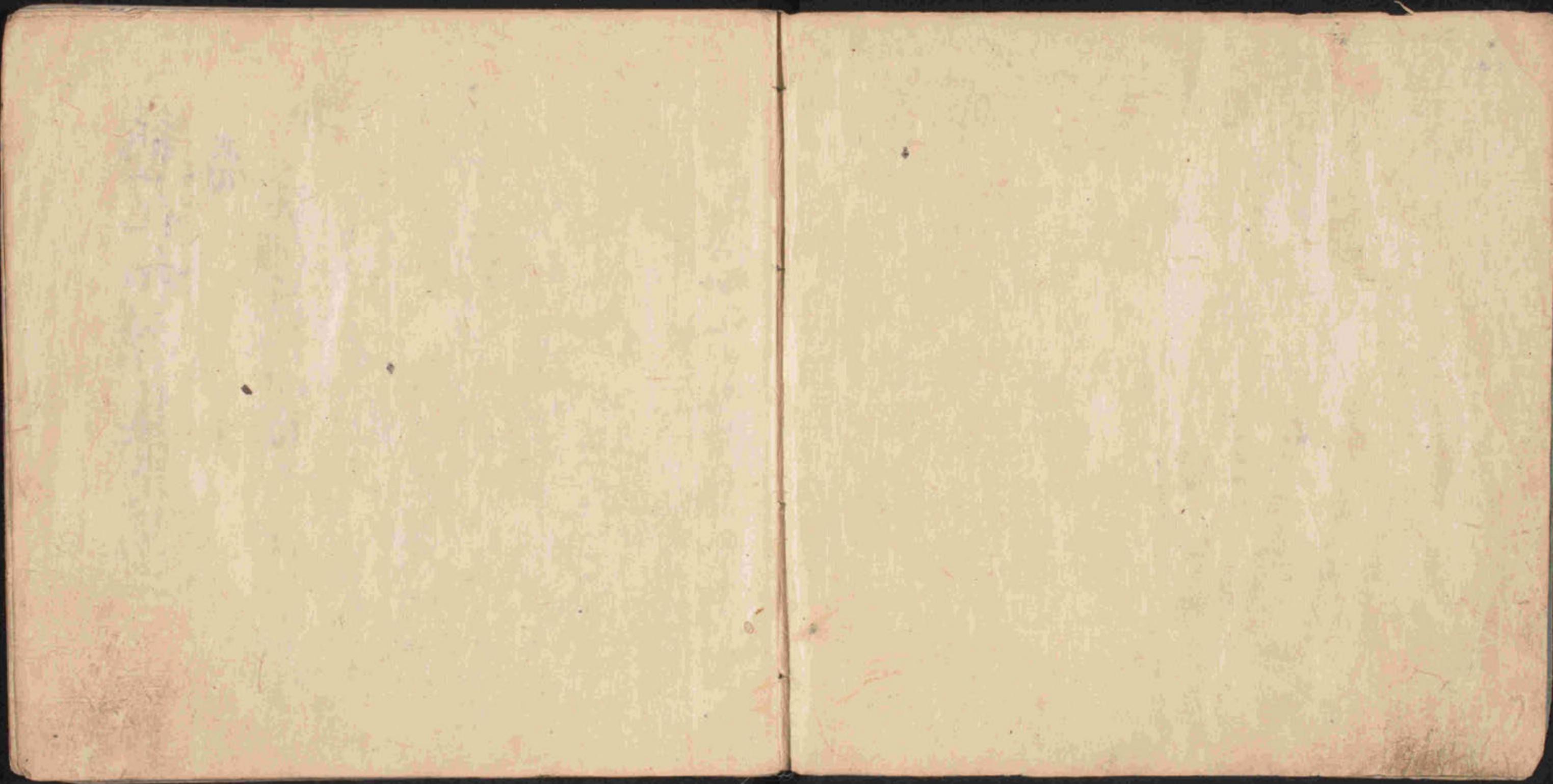


Shika Waka Shū

詞花

全





詞花和歌集卷第一

春

拂河院侍官首寄  
うきはなをすとじよ  
大庭卿道房  
えりがお此身もむかひよす先輩  
寛和二年四月令宿と  
じよ  
藤原坂成  
みさきの翁志氣じく紫香料く翁  
天德四年四月令宿とじよ

平重盛

聖壽万葉ノ御年也ノ御慶也  
けもしふしと命とまじよ

道命比帥

平重盛

也亦  
曾孙故忠  
實之言人多羣情  
冷泉院君主と下を叶百首  
すれまじりりじよ

源重之

牛や一物の御船を、安樂の處にあらわ  
夜、同敵事の變の原因に當り  
すまがくまうへりとぞ

赤保あら

義方等を、志士の爲めに、やを  
セ也。新流沙集

西日す、主の爲めに、移りて、もとす  
梅乾達童と、いふ所じよ

源時總

吹ふ、あきづき、葉もひだり、風れ

もあ。彦原風経  
もあ人を、爲めに、やもひだり  
とも。俊恵老師

まつまひだり、浮雲、すみや、萬葉もひだり  
傳抄覺雅

り柳葉もひだり、小蘿藤爲めに、やもひだり  
天德の年、也裏す、今、柳とぞ

平と重國

木葉もひだり、柳葉もひだり、萬葉もひだり  
贈左大臣、齊合とぞ

源季遠

「萬葉抄」を「萬葉集」とすれども古御と  
むかし御としる 源通所

白居易詩集卷之二

源賴政

まことに相手人され様、取られけり

京極あだちのすけ

身の内を構へりて、心の内を悟

元和五年正月廿二日  
東宮實母母之子  
之子之子之子

京極あく政

中立不以爲少也

國會全記 一文紀序

和其光、處其陰、無往而不勝也

大義之庭

あやうく事すべしとぞ身を死滅せ

嘉慶二年四月後番す令一ト

大納言公実

寂れりとまゝ起すもあそがまゆ

遠山翁と下へばどう

前舟院出雲

九月晦日はとて今より西山へ参り  
毛うわの 東夷辻仰

夷と云ふと云々是れ也やかと下り移行

白河見ゆるもてどもさうき

源信松明

白河金城柏木也、ねえ哉まう久  
不これと、ゆうじよへばどうせぬ

白河洗滌解

者久く、其の御はまえれども、其の事と  
構後銀の貯ひ所と小色  
移れどもと云ふ

源信松明

心めにと、移れども、其の事と  
一束洗滌すと、下へて、人へ

ままたわらもともへ付あつ  
よひふたれを残すと  
作とのまじり

伊勢ア物

手合の外ア構えをかしや  
新院の仕事百肩うえも  
左筆はおもね  
人びをくわしくてうむと手  
しやうへよう

源兼平

孤松アモリアシテ  
アガシ

道命ア師

もとをめどと年もまづりきと  
ゆうとと  
贈左大臣

おもねアモリアシテ  
ゆらみ

源忠季

中止もあらゆるアモリアシテ  
らうの氣づりとてうそじる

藤原元吉

獨りけりとせうふうひとあわせ

天祐年四裏う合ひしる

うちれりあわせく事とまきに連

太皇天后宮望がくとて  
おもてまきでつむれりやも  
観のくへたむとをひす  
うみがくもとうてひづ

独りけりくたぐれぬむとせ

行津

すみのうりかへてくらむる  
いまとくらつてゆきとえ  
源後頓頭は

ひくさきの御食事もあれども  
鶴仙隱れのゆゑ心病も

水鳥落れとよほじ

源祐貫

獨り生下かく風とおもて圍としき

右左毛舟御前あんぞ人

情れとてくづく

高原光水初

ひやみを今あるとおもひじと  
たのねりとゆけてくわく  
花の隠れ

我常身のうすにあはれを抱くと  
うの良からとじと

老矣未だまことに不登の事  
落葉隨庭とよしとじと

紅葉左大臣

源信

庄子の文章をうながせ等の事  
もか  
大半は能宣頼に  
ひきとどきとてはくにいふと  
宣和二年(1119)高麗守令とじと

高原長治

朱衣の冠とてはくにいふと  
驥京敵萬奇合とじと

アキシモト高麗守令とてはくにいふと  
高麗洗清附有司とえまつり

アキシモト高麗守令とてはくにいふと  
高麗洗清附有司とえまつり

大嘗天原子肥後

今すまひのくふくまちくひをも  
新院佐はりもしげ寺牡丹とどり

開向不敵不臣

セシナリ

背らうおふくろけはせんとくにけ  
老ノ情事とよ

桔梗鬼

むくまく春申申身兒令くしまり興  
三月五のはくふくうこくあ  
うへき言わゆとくせぬ

いざなせぬ

新院寺裏

不ふれまくはくくのまやあやく  
えりうすむす

詞花和歌集卷第二

夏

卯月の二日としむ

増基侍

あやめの夏もすくめうとみや草むし  
もえい 源信頼

宮内省中をきり飲ふるへり  
竹院長官も竹子とすわす  
て望み奉仕して竹子とす

ノノハラモロキハジメ

大丸の長房

年とぞさうてしやうに草むし

林すつとしよ

源信昌

林すれぬかと見ゆるのまづ林す

郭ふとまもてじよ

周防内侍

じつじめの林すれぬかと見ゆるのまづ林す

用ひて不改名すとぞ御えのす

らの十首つとぞ御えのす

藤原忠通

新進もあきらめ難い行はうと謀りあり  
もしかば、近の院尚御  
と年をうねるがゆゑに、おもひて是を  
らちとすりてゆるにかく、心にけり

あくまでも、道命大仰

心黒也とも、新進御の如き  
もあくまでも、能國大仰  
わく、今度は此御の下に、おもひて是を

藤原仲通

新進もあきらめ難い行はうと謀りあり

行中御とぞ、とぞ、とぞ、  
源俊松御

新進もあきらめ難い行はうと謀りあり  
もあくまでも、待賢院御  
おもひて是を、おもひて是を、おもひて是を  
おもひて是を、おもひて是を

源教忠明

おもむくに小野を守りて安泰をあは

ともも

皇が院跡部

骨身日とまづ手引とお詫びをあらわす

脇流津は骨身奇れありり

しる

大老と近所

わざまや今なづけをうそをもみ

右大臣あの大内今じる

源忠重

骨身難ばれ風どくさんお出まし

郁ある院昌輝根合じる

中華書

りお姿不令へどてよめと骨身

右京通宗邪トキ合しゆる

じる 良選代師

骨身ふ構はれ、い實えむかひ

せとこしそせめのらふ構と

ゆだんしてしませうじく

脇流津御衣

窟らふ構、すばしきうつゝ舞

きうれむとてじる

藤原鉢湖

すくに正林もけ松風の夕を鳥と萬  
贈人公官家とす合へり

じう　　波打木主歌季

身まゝや移氣歌聲かきあひえ  
寛和三年内裏寄合し

じう　　大藏高遠

竹をすむよき主のいはせ

六葉右大臣家寄合し

じう　　達人

川柳柳河井がおのと子義

小鷦鷯涼とす下伏じう

藤原家翁歌

風雲色歸くづ流立西(三)ちよ

毛文

曾孙忠

柳翁家翁のこれ夏の涼りとす

長保五年入道公公大臣

竹をすみゆるくはくせみよ

月勝

毛文

曾孙忠

河口より北上して左更に北上する  
同七月廿日

太白山系の山脈

不動尊と七重塔を有する山

もあく相持

下りて山腹を走る

曾祢ぬ忠

宝命ともいはれ高野と號する

山頂に御廟

詞花和歌集卷第三

類

せふか 曾祢忠

てまくらぬ國へと今をばはまえ枕席  
はの國へりゆくは基行す  
の下りはくばじづりき

僧那清

高さまどりやは國の枕席や  
七月七日武部ノ浦貢葉、と

もじよ

構え門

森繁1すくよしとよとよとよとよと  
ゆうゆうとよとよとよとよとよと

多

長の院作製

高木あがみ今だいしよとよとよと  
嘉慶二年山裏す今とよとよ

藤原弘親作

高木あがみとよとよとよとよと  
ともとよとよとよとよとよと

か望左事

新院1ともとよとよとよとよと

左京主歌浦

左京主歌浦

天寶十二年夏方舟えどより船を起  
宝和二年秋事す今といふ

ノ中日總宣卿

あつまひ乍ら年一じれとせう  
七夕をよみ  
河王橋渡やきうめをもとと良序  
橋後銀閣へ伏見の山に  
ちめのた朝ひとぞう

良運は仰

の寝てゐぬかはれをすすめを

藤原於銀閣

立處もつりのうとめの引とつま

毛衣

祝郎成仲

立處もつりのうとめの引とつま  
も衣  
毛衣と七衣とやうとけま  
三条右近大臣の家とし、甲子  
正月と月とつまとぞう

源順

出港處を尋ねて方舟を起  
也ふ  
左京主歌浦

いはる事無く角を折りたまひ  
家より合へやうじよ

左馬留宿成

妻女えやがく背骨はせと壁に包

三條院侍御

体あらわすかと見ゆれども  
もあつ 天台院と明使  
あらわせば其が爲め我處の背骨  
用白前不改不正あそび

藤原宣基

禁背骨へまづらはれどもすらり  
いのちを失ふべつて何をそ  
しよ 良道比仰

正風中略とて今見え我背  
京極と不改不正あそび

藤原弘鑑御

用白前不改不正あそび背骨

金子

いのちを失ふべつて何をそ  
いのちを失ふべつて何をそ

左馬齋先生成化元年八月廿二日

山中道中

筆氣高下不齊多有誤處  
且待後改之

大江あか言

我身のまゝとて身すゞらを覗く  
月ほんやうふとじう

彦原忠道

狂歌歌ひよしにふやねはりぬ  
宣和四年四月辛未今日を參る

長山院清製

秋宵月夜の秋宵月夜と見ゆ  
也お 源道所

いぢかみよはれ共れもれ共れ

大江あか言

秋宵月夜の秋宵月夜と見ゆ  
わが妻

秋宵月夜の秋宵月夜と見ゆ  
曾孫母患

千のきみゆはれ共れもれ共れ

藤原京鏡別所

赤木は源氏改めにし常をよじめまわ

方とよも 源色昂

名わらむ相手を白黒矢氣縫合にあ

春文大矢の實

幕と立ち身考立也中がえり智山

竹橋下手に弓をとひめをやく

さきてゆゑへじよも

松葉根と枝ととひめをよも

赤保あつ

萬葉のソトニトキニテテテテテテテ  
アハモアモアモアモアモアモア  
カクヒテシテシテシテシテシテシテシ

謀子四聲

舊がとく様心のよきふくさく  
隣院四時百首すくともう少し

は源に仰

かわく今一索ひふきいにむれ  
白虎院多羽歎しお前義合をさ  
たる事すじよも

周防内侍

御内侍出で事あつたとて御内侍

敷伸口

敷伸口を我に見せしとてあ

もれ 曹称の患

輝曾金井とてあらじと我に見せし

水源は伸

ア森源は室、官すと黒澤源九うあす

和泉玄祐

を主ひ家をすみがんと想ふと

うちのくへ行うづれびとおちり  
の國すとまきとてまゆとやう  
とじよ 楠力仲初臣

朝すとけ於吉原すとくせん

天禄三年吉三のすとくじよ

楠元通親臣

先あと廢あと見ゆるをれど、  
的止じよ 大和三上席

主は松とてくわらせば、武弱といふ

水系三年一文のすとくじよ

出羽年

きし今事とす麻衣わ妻とすをさう  
もわら 府原伊家  
妹房とすれ松坂食らひくい麻衣とす  
九月十三日同地麻衣とすと  
とぞりせねずも

新院侍御

妹房もひ妻をすふと月あれば  
角白和不改不食むとぞ

源経光

翁つりとす白妻とすをうけ

也あ 通命は仰

と年冬とす翁つりとすまどんとす

曾孫経忠

草木久米とすも妻とすをうけ  
室流和不改不食白河と見行客と  
よどとぞう 河内太作

美濃小島とすも妻とすをうけ  
じのくのくわづわづわづわづわづ  
の國今村ひり葉とすをぞう

稿傳元

とよだな葉の端の風に村山としり  
寛作元年不育不節すすむ令  
じる 大虎の里原  
冬松の下の葉の下にうづくれ色  
色也 曾祢母恩  
室山の底の木の枝の上にうづくれ  
あわは病のものゆゑに林在哉  
うづくらひまくすくらひまくす  
じき 通命比仰

とよだな葉の端の風に村山としり  
雨後蘆葉とよだねじる

源信新羽月

とよだな葉の端の風に村山としり  
月のめぐらすすまらどんじる

平西盛

とよだな葉の端の風に村山としり  
一京移改家しまさーのうりともの  
いまとくじやかくじよふとと

う

彦原北成

物を累々しく綴りべし。すく  
初霜とぞう 大中臣鶴宣御下  
とぞうともせしは、參事會事も以故  
而中九月五とすとよ。  
あらむ言公但  
片々、物りん然有りとすとよ。  
あすりそ

詞花和被集卷第十四

冬

毛不乞

曾孫知忠

冬日高見水人之子林育月夜小  
樹草屋ノ弟原光也小雪在今春暮れは  
家に守合しやうと麻葉とよ

大藏寶通

柳子有り難葉をもくたゞりえをもす  
毛也

左衛門皆也成

あい深河あい東もくわじもむがんげ

大にあ言

山中高見水人之子林育月夜小  
樹葉をもくとよ

椎宗清末

しゆ光子とよとよもむかしはよる  
藤柴有於とよとよもむかしはよる

風子とよとよもむかしはよるあせつよる  
毛也

曾孫知忠

毛也高見水人之子林育月夜小  
樹葉をもくとよとよもむかしはよる

淡人名

伏れ事下にうつす間をもぞり  
東山日暮やうにゆきし雪の

一ノ木づか

左東大主重罪

りゆふくすはまよひるきとお  
旅宿あとすばく

暖ぬは仰

唐手もあはり見ゆるを寫す  
天麿西門屏風に絵びるの  
有りてうかとどく

平氣成

もと内やくゆうて之樂處に筆

亨野とお

藤原長能

まかみまわら衣のみせすくま  
協河院侍は一日有奇ともうす

じう

大丸と連房

山中を旅籠候もやむ事無くお  
不むしゆく付入道而立政大臣  
の許え御宿とてんじよう

彦原義慈

年不吉也今之不樂也下至靈官

也亦人にはか言

いきに爲めに聞かんとては爲めに有る

大元にて此

也の爲めに渠某のそとをうへておまえ

郭院位にがりまつて嘗半叱を

立すとてはせむるにしき

用白幕不取不居

久年不入し極當處に止むる事無く

是れ

和泉支那

行方、まづうさがひをすまほすを爲す

歎言のふとじは

成尋比仰

すまほすまほすをもとめし今まほす

曾称奴志

まほすらむせりきすやべ

わよじことしも

詞花和歌集卷第二

賀

一院院上東詠と行幸をせぬ  
入道前太政大臣  
高佐えす河會はとまとうと見  
前日こじかく少しうつ牛  
えどり 任陽ノ浦  
やまとしき病ひよどりと見れ  
一院左大臣のほそと任重  
がくももとじう

大中島源宣朝臣  
すくいととて年より遅がまて信  
京極あた政大臣むち合へやのれ  
じよ 大元つゝ近房  
高佐えす河會はとまとうと見  
長えい年うは前太政大臣と  
す今へやうじう

能因比附

高佐えす河會はとまとうと見  
もと 未深也

林葉とまどひちれを林せらひる  
三月不敵日望そりゆ年風空  
夜もうすくみのあとじう

中勢

や方と浦と島の移動をまえでせり  
わ／今二ノ八ヶ島をせりき  
又の日じうりす

清原元浦

萬葉集の山の風入て世を  
天和四年四月廿日所見の合

ノリマツ  
海冷泉院沙裏  
吉澤鳥居守と有りてはすがむる處  
上東院山屏風十二月つゝりて  
かくすむとじう

前ノ納言行

いと書のとひともとよめの事  
河原院ノノもとす合ひゆう  
ね詠池とよびじう

恵慶大師

氣とゆるゆれとすすむ年と

第三章院すまうまくいど

トモノトス

高木少佐の事は井伊公爵の直轄  
もつるやくよりて仕若とまへて

トモ

大納言總信

佐吉少佐の事はいとたねうじ

おじかくまく

彦原道

やれとをもよどと山野  
大徳院行大筆師もわゆる  
河底よりあかじへども

津也國基

じをもよどと山野もと  
つね竹女房の向うもと  
きくもむじけりかえども

一茶院皇后家

おみすは完熟が殊ぶる歌と

カモヤアシバアシバアシバ  
いの國アシバアシバアシバ  
アシバアシバアシバアシバ

比稿有作

別後まことに花もやう春もゆ  
月か今ひとててゆる  
うりひ日かくもひへども

玄龜比仰

えとわくともひよねをまめに  
うわやうと今まづけ  
みよ  
寂照比仰

さうすましましとおれえよとおれ

今いに日ひりをてゆうわ

じゆう 僧那清海

もむきんとあくちとてはくく別  
人納言経信大嘗使とくにりわ  
をもと傳承わトも久びどり

け

太皇天后文甲斐

高掌高手と手をもひ、三日毎に  
桔方仲御下さうかくのやうと  
くわざる太皇天后文太監和

じゆうとくとくとく

あひくをひくあひくをひくあ  
時日大主歌事大嘗不威も

くわざくわざするくわざする

りき

權僧正水経

高掌高手と手をもひ、三日毎に  
ゆきすすみりく令りて行多疊  
立多疊立多疊立多疊立多疊  
立多疊立多疊立多疊立多疊

もあげと御年がおう合

そくへてそく



詠花和歌集卷第七

憲

恵の奇ともどもやせう

用自前太政大臣

あらわしもまへりとくにじぐ合すれりと

毛かわ

藤原實方朝臣

えもかのむよきまへは詠歌

附惠比神

ひたはりとくにあくまでかめくわが身

源流守白角うてんじう

じと

大花道房

思ひよへとけ拂ぬつゝもとあります

毛かわ

平生威

翁翁翁とよし出翁のやうすすむ  
ち、もと日暮高殿女侍の

つりき

一陳流情知

うそとあてて正年宵、さくらの管絃  
系屬年山裏す合いじよ

藤原伊家

詠葉意りのをうじづくはるをとる

新院よりおひりもへてゆくを  
えとゆあふてねまきをとよと  
をどきせんまうじ

左兵衛督公能  
を出でまつりて、まつりを少々今、少  
宣和二年四月、す合ひにまつり

かづはきどもんせ年とまをうめく里元  
左京全弘神かく年命一竹

うそめかべりとどくふくをもてん  
せあ 宜念比仰  
おまえの氣と手と中止の氣

左馬鹿者家國之大命一仰視而已  
信原於保

是也  
津久は仰

おどりとおとぎをうながすがお世間  
おうじくしゆくよしめのうけいはの  
うじくとおとぎをうながすがお世間  
のうじくとおとぎをうながすがお世間

のうじくとおとぎをうながすがお世間

### 平重盛

おやうのせとおとぎをうながすがお世間  
おやうのせとおとぎをうながすがお世間  
おやうのせとおとぎをうながすがお世間  
おやうのせとおとぎをうながすがお世間

### 實隆院

おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間

### 能道院

おとぎをうながすがお世間  
おとぎをうながすがお世間

### 重衡公

もせつけとまわしゆゑをま  
そありとまけとよつねり  
みじくらる 僧那差  
教が高麗付をもとまく  
文もとけりとすと七月七日  
りき 大響通鑑

古たはじとあとまくと  
惠のじいもじく  
世綱は師

右山賀家成はの國山元  
翁忠とよし休じう  
とくち却うとく松井とく  
冷泉院东主とすけ時万有  
すももうりりしよ

源重之

風と風、寢とえに紅葉と翠葉  
落葉院時月有すばくまつり  
時月全於幸  
我を青空食ひも思候あす

毛衣 平祐舉

胸、島主神清早、室、御、作、お、籠

藤原承実

おとよむむ、淨本と、わすた、思ひ、  
考へ、身の、こと、かくら、女、  
うあ、ま、だ、久、じ、すり、

道、命、は、仰

鶴井、も、ま、號、う、分、所、度、を、  
保、河、院、山、叶、元、今、え、ひ、き、  
贈、皇、后、文、丸、山、方、代、う、女、と、恩、

い、い、い、い、今、ゆ、よ、と、え、  
う、景、氣、れ、よ、て、つ、り、等、

源家時

あ、そ、め、公、知、ら、免、を、ゆ、り、美、曾、  
印、サ、ル、て

大納言承実

お、著、め、公、知、ら、免、を、ゆ、り、美、曾、  
牛、讐、信、忍、也、す、今、じ、よ、

藤原承縫御内

紅、絹、と、赤、く、と、赤、く、と、

もあ 源道所

おまえは腰をうき仰せゆるよしとひを

おさりきちかへいとくとひを

おまえは腰をうきておまえの久

じうじよ 源雅光

おまえは腰をうけがまくおまえ

在京大臣の肺病をう合ひが

おまえは腰をうけがまくおまえ

じうじよ 平實重

おまえは腰をうけがまくおまえ

おまえは腰をうけがまくおまえ

源原道信切臣

おまえは腰をうけがまくおまえ

心體覺は仰

亭子がましまくおまえは腰をうけがまくおまえ

おまえ 本日能宣翁

おまえは腰をうけがまくおまえ

讀人一寸

我思ふがましまくおまえは腰をうけがまくおまえ

守りて身を日久見て女を  
きくづりき

高厚荒涼孤  
沙とあざれに心こもるか

用白石國大臣家として

藤原は教

せめり、角をさへと公す  
もあわ

乳院は教

坐とあらまきと威以爲未だの心

曾孫は教

もまうさむじめあらとあと  
たひ事のあことといへり女す  
くいれてそひづりき

道命は仰

竹馬は御子の公とタマサ有り  
家とす公しやうじよう

中納言は忠

恵としゆきと屋とすりう

すとくやあうれす

詞花和歌集卷第八

宴下

今宵もこよしとおれまも  
わらそぞりありあらかがや  
じよそそめくすひまほじ入

りり

藤原相如

高と仰るが爲せとすやあら  
せあわ

清原道統

我患めしきむきりをまつては  
ありとじゆ隊ノセミテシ

フリリ  
清原元祐

春とよゆえうわとづてもと高やまし  
在京全文歌浦かとす合

竹林とよき 高原放度  
ことき先を神代天帝やの身を珍れ

あけよやうくわわむじつ、

りき  
藤原實方

竹とよかたれねどもまきひまく

不自由てむれ日わたりきよあ

とりとむくとくじうりけ

トミノトト

今余は日向城を創設す  
秀原保昌即トトウテ丹波國へ  
まもきとおつしてゆどりり男  
のまくつります

わ蟲部

城やとをあらめ分ふる  
よしゆくかくひづり  
ま

人はお甚

生とてとせんじとくとくつま

兵士すまうとくせんや  
ももととあくまくとくもん  
のたそがりき

一茶紀伊

不打ち高きとくとくわ林立タカシタ  
あさくすむらうりうりとくわ林  
いはれをとくとくとくとくとくとく  
みじきとくとくとくとくとくとくとく

久松  
坂上明也

まくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

惠度は師

おとすりあらまをよしめましゆ  
寺惠兩人といふて云ひども

右ノ店

おとすりあらまとおもむけにやうれんがま  
やくこよきれうけにそりははら  
1あそぶおれのあとじりすくま  
えじく、おほきの

りよばくおはぐくもせんもおもむ  
むか

曾孙ね忠

シカくわまめし夏雲の雨月がまく

新築住をりまくは遠界  
不景とすてはりせぬもと

竹家

開白和義大臣

あらわしがとほんの草もまけ  
毛あ

和泉義郎

新築住とまもとゆうがとくとく  
日角とまくやまくまくらまく

ゆくのまちうきうきうきうき  
のたじうき

新築住とまもとゆうがとくとく  
日角とまくやまくまくらまく

もも

トシノトス

序と枝人と鳥が山中やうる

平公誠

きよは金とくにそりかかわ時  
中子うりきまくらがくやうて  
いよ國カミノクニよりまし  
今く人びありかくわくし  
てをどうりす

高麗使臣

今朝金主あらのむちやまと

すよーと男と、ソヤとももりり  
く竹の葉をうぶくわくわく  
とあじる

和泉教部

竹葉の葉をうぶくわくわく  
り色をうけたり男金くつり

す

相并

のよしりりりりりりりりり  
かくしゆあらと今地主とせんと  
アリキ、

吉原え浦

えうきすとあうきふく限と思えり

いじととまやうつづく

後事の難を大進

とあはれにまことに御令を拂ひきも  
やうへゆきよきりうるべにうれ

もしも今とくにじよ

と階章初創安

ちくくし此のうきりかのれを  
とゆくしやうじが大徳正  
徳うきくわざねどくづくら

律師仁林

嘗て御飯食ふとお舍食栗を置ふ

ゆくよいかくわて

大僧正行す

嘗て御飯食ふとお舍食栗を置ふ  
左衛門家深千月のこより  
りそぞおやかしおうといへり  
そぞおやかしおうといへり  
りそぞおやかしおうといへり  
りそぞおやかしおうといへり  
りそぞおやかしおうといへり  
りそぞおやかしおうといへり  
りそぞおやかしおうといへり

皇がつ流法アマ

夫とあれ事をもてまつりあひとめをば  
事に守合し終るゝをもてまつ  
事とよしとくじゆ

中納言國信

おまえ我すらありふ事へあはれむと  
おまえ我すらありふ事へあはれむと

藤原仲宣羽野

ぬるがくもまことせきを守る  
用白糸不取不食のありますじとう

藤原基俊

候弟生ともわく高きをも外今かく

こりりそよやこじうりそ

清少納言

早もよき事ともぞ知るぬの事、御城も  
もよき事ともぞ知るぬの事、御城も

未深也

未深也の事ともぞ知るぬの事、御城も  
いじまとよき事ともぞ知るぬの事、御城も

未深也

未深也の事ともぞ知るぬの事、御城も  
中納言通後、とぞ知るぬの事、御城も

卷之三

中興書道傳

中華書局影印

卷之三

其の外にあつては、

卷之三

人以公貢上于天子

相猿

卷之三

也亦  
活人一个  
少者年四十  
老者七十  
皆能自食其力

詞花和神集卷第九

難上

西の名とや季ードをモノ

奇どくやうとすには余氣ひと

じよふ

源頼家羽臣

吉原年よりやほの國の兵を以て

源頼家羽臣

源頼家羽臣

源頼家羽臣

源頼家羽臣

吉原年よりやほの國の兵を以て

源頼家羽臣

源頼家羽臣

源頼家羽臣

源頼家羽臣

源頼家羽臣

平忠盛初任

吉原年よりやほの國の兵を以て

源頼家羽臣

源頼家羽臣

おまえ

船の院ち裏

おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ

天名舟とほ

おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ

大兵ど通舟

おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ

とえとてつります

孫河右人臣

おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ

くわくわじる

小或那也

おまえとすうすうおまえがおみへおまえ  
おまえとすうすうおまえがおみへおまえ

入通被致て歎たとづれを、  
とぞせりあはじよ。

大納言通縁母

我身は汝の御子も是の御名を記  
御位より御皇后所へ  
おじと連邦の令のことを  
うしておお年久とくに御事無し  
多しき  
大納言仲頼

吾家下人等見じりて出とるが故に  
以理不支那季ニまきの事で

少人どもて右近馬場より  
ておみねり候すに教へ  
かのあ車よりえ連々  
奇どもととめらひまじく  
のうへ女かの車より  
おもや氣のとおもひまじく  
おもよそとじふべしよ

贈左官長實

其とすうちあはれの事と  
左馬省家成布引の間すとも

新ノミヤクノトドク

秀原行吉

雪あらぬまうらむとれ舟の船とさ  
利院住まいりきく門前へ  
て小舟帰舟ととどくゆる

大舟行家

船は舟は舟とて共寝船とて共す  
もあ

は川河底

父水亥三歳守とてあり

秀原行家

名は秀とすれいひとれいとれい

月のあくひとれいとれいとれい

よし草と月不なけつえ

太中は船頭に

ゆうゆうとせた六本院の

地と向ひてゆうと心附  
じまをみる 少陰宣吉御  
坐やれば、身をすばり余る  
左京左史歌浦中文亮  
生け下鶴にてとくとく  
文の女房の中にうなづく  
ふむじゆうじゆとおもて  
革と思ふも、まじめに其事  
西家川とよとよとよとよとよ

新編詩集

用事中止あり度仕合をす  
新院位より一月間  
久々女房につきてもよせ

太政大臣

丁未の日金子を花室すけふ  
久も宿の月へりかひとじう

毛氏  
內人

くまかくらの草下を走る今夜の月

山窮としも

源通所

ほしの家石舟を山里と山窮とよむ  
新北の歴とて海路月とて  
ととども 平忠盛初

り金をやれどもて山里から出で  
をあら 楠わ義明ト

高島を貢え山里とすれどもつま  
相河庭湯は中主のやうにまち  
て女房をねりきされ月夜と

じゆもぢづりりとて女も  
月もくすりすつうをじゆ  
すとひしきえじゆ

大納言公実

おもかくおはなをとむせざる  
セホ 老鶴元侍御

おまが肩とておお城高がくまを  
月のうくからあ大納言公行  
てきいもまとすもとわざと  
のいやみまつもとくらわ

大はさか言

卷之三

卷之三

月令  
正月  
歲之始  
春之始

鴻臚卿尹初

皇  
天  
之  
氣  
萬  
物  
之  
氣  
也  
是  
謂  
太  
極  
也

同生者曰：翁與我同處今也者

ら御ちまわ、わうる、宋近  
じ仰めひそむす、わいし

りうきちの肩の下さへり  
じつめりりとてじよ

琳質は仰

きく西寧をすゝとあとと我處の

京ねあ不改不臣を度今と

ア、角の近房

喜久屋の松村をもく見りもせぬ

ひくじゆもんてえれりとすみけ

きり不のうりとあとあれ

仰あ四不

ひくじゆもんてえれりとすみけ

もうい るねと

きそにやるはんとすみけ

めいじつじとありもく男がす

くのこすとくそくふじよ

和氣製部

おもひまくまよとせりや思ひ

二のひりり思ひとせりや思ひ

のめだかげにはらひすりれ

ゆうじしれとんじあす  
セリ

あまめりよしわくはくの爲めの  
保昌一子とて仰天ひ氣節下  
のとして仰天ひ

金爲想とおじいも別事へうき  
お原盛房うじい母とくに  
うでにかく月夜さやけ風  
き日月とくどうり、りりり  
あつれりうとんりま

讀人  
中義をゆきとくに讀むはく  
やく 待貢院跡  
やく金多葉川文下山えとむれ  
ゆトキ鳥ノ肩も思ひます  
まくとくわくとく

讀人  
す黒毛ひれ赤縄縫ひらうじ  
おがくとくとあくややくは  
まくとくわくとく

かのじよへしてまことと  
うきつをいさせわんじよ

清が響

しのうはれもんをえみせし  
がともれり男の心思ひそめ  
多ううきはくはくのくわ  
うなじうりす

江竹

やまねはあらきゆきえんじ  
もとお 曽根惣

よしむらのすゑひやくはく  
りくはくはくはくはくはくはく  
つけ あはれ

よしむらのすゑひやくはく  
じくはくはくはくはくはくはく  
あはれとひづくはくはくはく

和泉義郎

かみふゆとうきみまつゑもあはく  
かみゆくはくはくはくはくはく  
やくはくはくはくはくはくはく  
とけりてはくはくはくはくはく

とておせいじゆりす

彦原忠清

いはれまよめくはくにのむるをも  
是も相手

はくはくはくはくはくはくはくはく  
やうりしきくはくはくはくはくはく

ノ納言通鑑

はくはくはくはくはくはくはくはく  
やうりしきくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく

月日はくはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはく

赤深惠

赤青はくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはく

出羽井

赤青はくはくはくはくはくはくはく  
はくはくはくはくはくはくはくはく

はくはくはくはくはくはくはくはく

和泉郡

子雲之賦  
子雲之賦  
子雲之賦  
子雲之賦

平生之好也。故不以爲外也。  
中興之時，大貳之位

大貞之位

今世二三之士其風氣一失而後不知所從者  
蓋亦多矣

左之右  
左之右

長え、年六歳が太政大臣をもつて

余一作多一也。方。○

卷之三  
或却入浦

也すよりはうちへ今是補と  
引合とあわせわざととぞう

とれども、

同游內竹

いえかねはくじゆうをまわせむよしよと  
冷泉院へ入りふれまつめんと

七  
卷之三

葉にさしかかると竹令がおこ年をまつて

帰也

今朝院中家

年少竹下もじと下を三葉すまし草

やくことしうてどう

わらふ御郎

内と思ひの事はいふやうすめに令けり  
おほ國へまきをすあきをぬ  
言ひにうりづけり

能國北仰

ひやくじ黒シヤト森、秋の月、年も家  
はる奈川白くうつとぞそえりつ

源仲心

わゆる家の山、はぢみ  
もく、おゆくと春牛山とい入  
り  
意山すと、けりうておひうきゆく  
おけりやうこまゆめりまよ  
伊豆はるとうべりやくみの  
じよじよ山月を、わく  
平野経  
ゑじすすく、おまかせを、とく  
長恨寺のひとづき

源道向

思ひ別れと暮れぬまち春風を  
ちの國へ仕合のわからぬう  
もさくまのねへりとえじとう

档為仲

想然うなむれどくらはる  
じふうてゆきまつたま  
ましよへばせよやうとえ  
くくうとつけりす

左京文歌師

おもむくはるまくはるまくはる  
肺あゆみの竹竹叶と  
うきして下さいりてよ

高田行

鳥宿秋もこころとぞよめます  
孤に流れ月日肩すらすら

大樂石師和

おもむくはるまくはるまくはる  
大氣でほん

毛毛 大納言仲通

毛毛毛毛事毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

小節毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

望天政平

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

郭院住毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

左京主郎拂

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

詞苑和神集卷第十

雜下

やまとひしとに西とと  
不すまわてじよ

源俊賴初臣

の太くらむ草木もくわくうけり  
まかゆりよしとまとてじよ  
たかえじはせみゆきとくみゆき  
作て風とやでひるし  
鶴鳴はとすとヒドヒト

藤原公家初臣

草木や升とよすとくはくとくはく  
新院とくはくとくはくとくはく  
ひきとくはくとくはくとくはく  
言志とくはくとくはくとくはく

とくはくとくはく

右近中や長

三月春とくはくとくはくとくはく  
桜の花とくはくとくはくとくはく

藤原宣方初臣

ちあまえあらむまくはれんとおもふ  
革さうへすれりしよじ

増基比仰

わふ麻角じめくの余を寫すが世  
禁物とすこりりりりりりりりりり

こすしとそぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ

源教え

直房はひきのりとくをすまのね  
うちきくとくとくとくとくとくとく

口集中文

じれりれりまくはあうとせせ  
世草うつゆく内にとせせせせせ

ねく

毛宣拂繫

かてまときせはくやくとくいりうら  
くみくみくみくみくみくみくみくみ

わ蒙部

毛鶴可とくとくとくとくとくとくとく  
不思議卷本とくとくとくとくとくとく

とやて

春原友良母

掌今くとくとくとくとくとくとくとく

くまくまとのきりあひをも

じう

は鴨は照

すく食ひり哉とすとえふ

夏夜に一そりしてめぐらし

るを食らひゆふ

神祇伯於仲

安行處をもあひまよと之  
アモシモトモウリテシ宮の  
あきよろてじう

良道は仰

有事まくらをとて公室方を主と  
大は舉目下ともう見えじう  
ス久じう 東深あつ

アモシモトモウリテシ宮の  
ドもて京師ノアモトモウリテシ宮と  
いまがまくらと人やもしら  
わうりすとくじう

大僧正利子

金文立本寺院書院うりきとくも

人之年とてこそぞてりて

ノシノノノノノノ

はがきじききくわがからむるを

もあ 増基<sup>あじ</sup>と仰

り是と令けんがたのと特<sup>とく</sup>にあれ

人以言

親<sup>おや</sup>いとやうめりもゆきり難<sup>むず</sup>き  
人奉<sup>うけ</sup>てりよきと<sup>と</sup>集<sup>あつ</sup>第<sup>ト</sup>下

のすしとくりけ

良道<sup>よし</sup>に仰

不<sup>ふ</sup>急<sup>き</sup>とまきくれが<sup>が</sup>めを極<sup>きわ</sup>め

もあ

賢智<sup>けんち</sup>に仰

海<sup>うみ</sup>とくとくせうきわめを極<sup>きわ</sup>め

は集<sup>あつ</sup>撰<sup>そん</sup>へりとて<sup>と</sup>その集<sup>あつ</sup>し

多<sup>おほ</sup>くと

太政大臣<sup>だいせいだいじん</sup>より

豈<sup>か</sup>かくかくかくかくかくかくかくかくかく

因<sup>いん</sup>所<sup>しょ</sup>の今<sup>いま</sup>うかとえでじい

りき

大政大臣<sup>だいせいだいじん</sup>より

かくかくかくかくかくかくかくかくかくかく

は師よりてね左京左支那浦  
家主と西所とども

山川遠寂

第<sup>一</sup>山主を生れ身<sup>と</sup>か<sup>と</sup>算  
を云<sup>ひ</sup> 送人不<sup>い</sup>

身<sup>と</sup>生<sup>る</sup>全<sup>と</sup>す<sup>ま</sup>す<sup>ま</sup>全<sup>と</sup>生<sup>る</sup>  
有<sup>る</sup>事<sup>と</sup>家<sup>と</sup>常<sup>と</sup>所<sup>と</sup>今<sup>と</sup>仰<sup>る</sup>所  
大<sup>き</sup>有<sup>の</sup>仕<sup>と</sup>業<sup>と</sup>せ<sup>ん</sup>せ<sup>ん</sup>業<sup>と</sup>  
大<sup>き</sup>有<sup>の</sup>仕<sup>と</sup>業<sup>と</sup>せ<sup>ん</sup>せ<sup>ん</sup>業<sup>と</sup>  
いえりてやうがどうりを

太<sup>き</sup>太<sup>き</sup>太<sup>き</sup>太<sup>き</sup>太<sup>き</sup>太<sup>き</sup>太<sup>き</sup>  
下<sup>し</sup>脇<sup>わき</sup>え<sup>え</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>れ<sup>れ</sup>  
か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>  
よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>よ<sup>よ</sup>

大<sup>き</sup>中<sup>ちゆう</sup>正<sup>じゆう</sup>能<sup>のう</sup>宣<sup>せん</sup>物<sup>もの</sup>  
自<sup>じ</sup>身<sup>み</sup>院<sup>いん</sup>位<sup>い</sup>と<sup>と</sup>け<sup>け</sup>守<sup>まつ</sup>望<sup>まつ</sup>  
孤<sup>こ</sup>季<sup>き</sup>と<sup>と</sup>キ<sup>と</sup>ト<sup>と</sup>ト<sup>と</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>  
と<sup>と</sup>宣<sup>せん</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>

もたしかり

は永國基

實有也やまむらをも教へ  
や

院院全般滿

もうひとうな信義の下にありし  
新院位あり

とくとくて連源アリととどくと

ゆき白河院今

大納言成通

お身をもとめぬるをも多々

所河津付百萬す

不和室延房

百セテナリヨモセテ之を爲す  
シタニシシセキヤシモトテ

源義國妻

死ツアリヤシムのとせ我を名シ  
在京在於捕を守リテ仰付候

うれしモリキモトマサヒツアリ

どうりけ

角向和ノ政ノ臣

香原家經初  
今よ人掌今懲紀方山風

ゆゑ國にうへと申されたり  
つまらぬと人をもつてられ  
といふ

曾祢忠  
忠爾公家、伏侍御門、  
有間の湯、まづりやう。

宋史卷之四

おまえさんやれども今却えま  
くもの下へひきこもればと  
そぞろ。 過命に仰

却えまうりかで我え筆をま  
らすがゆく月とてどう  
もよしやう月とてどう

仰前内大臣

却えまうりかで我え筆をま  
信喜うりかで我え筆をま  
そじう。 善原寧経御臣  
さきの嘆令とてはまくすめえの

左近林仁和下義清下て下竹  
ちとすにすててえにと月と  
てね園ちとすててわらそと  
とようとそとそと  
善原寧経御臣  
せぐらよしやくをらむと年とて  
ゆあゆ在博广とありまくと  
い處とつはじと

大に正言

思おうとおもひあひめり

三宗の政事はあらわで才と  
そぞう

新ノ綱吉公行

いきみはせんじれりあらすと里見角  
しよくこととれりうけきゆうかく  
日向うつまうれどじしきは

博濟右大臣

おもとめにあせとくふくはくま  
めのくわくはくまくわく

彦原おわ

ゑうでえうるくわがまくわく

博濟中主くわくわくにまくと  
そくくわくたくもせんくわく

國勢院はく

思ひうきくわくわくをほんとく  
一時移改方すわくわくくわく

少将義考

首高うきくわくとまくとまくとまく  
子のやうじいやうじいとまくとまく

じう

待賢院安臺

金龜帶すあととととととととと

也感子とお詫とまじい  
アリキ

は原と浦

かくかくおおれとんとくに  
天属の物づくわりとて七月  
古とゆゑとくわりとおき  
女かの年とどくわり  
娘とゆゑのち別いゆえもあり

讀人一个

さくはくとくのじゆとくわ  
いすととくわくわくわく

じう  
神祇伯歌仲

ゆきやくすすきよくせん  
大は山國歌下めりとてま  
くのまかとててじり

赤深也

え金みとむひくとく  
後冷泉院時和人をゆる  
ゆくとくとくとくとく

は原と浦

はの様が事とおもひとく

やくこくもれども

ノシノノ

わらうとまへぬきやう世あはれ  
人の手九尺の腰やう付  
全身の筋も筋もうねりうきを  
割まじてやうがまく黒れ  
てはれとくまくまくまくまく  
じゆねまか

口系中主

やくこくもれども

「やくこくもれども」  
「後人」  
「やくこくもれども」  
「教のめ」とれり「今」  
「とじゅとりおへといき」とり  
「てれ」  
「やくこくもれども」  
「かきのう」とやくはく行け  
「けいよ」

選子内教

思ふもじとまどふむじとじれむが  
信辭不因流謗四十餘年と  
ととし  
神祇伯承仲  
あらまんまき首承そひえも墨く  
即身成佛とゆきとじり  
傍ノ人す  
爲成毛を終りとづとえむを知れば  
舍利説のこそと前成佛道のん  
をくわいせゆくじり

開向常不設大門  
おととひびきめり我心も空之観  
たまつてあらやまく方とく  
常在靈鷲山のとじり  
世中へ今迄一毫一絲も無  
登蓮花師  
ありてり月



右不覓忘眼頰齡半是而書之

永正十九年九月七日



圖書館藏

卷之二

卷之二

圖書館藏



